©2019 国立大学法人北海道大学

一般教育演習（フレッシュマンセミナー）

グローバル・キャリア・デザイン 2

第 25 回ファースト・ステップ・プログラム
アジア全体報告書

2019/3/3 - 2019/3/15 Singapore & Thailand

©2019 国立大学法人北海道大学

目次

・ファースト・ステップ・プログラム（FSP）とは？ ・・・・・・・P.2
・参加メンバー紹介 ・・・・・・・P.3
・班の概要 ・・・・・・・p.4
・研修日程 ・・・・・・・P.5
・事前授業 ・・・・・・・P.6

～現地研修（シンガポール）～
・2 日目 ・・・・・・・P.9
・3 日目 ・・・・・・・P.10
・4 日目 ・・・・・・・P.11
・5 日目 ・・・・・・・P.13
・6 日目 ・・・・・・・P.14
・シンガポール訪問国調査活動 ・・・・・・・P.15

～現地研修（タイ）～
・8 日目 ・・・・・・・P.17
・9 日目 ・・・・・・・P.18
・10 日目 ・・・・・・・P.19
・11 日目 ・・・・・・・P.20
・12 日目 ・・・・・・・P.21
・タイ訪問国調査活動 ・・・・・・・P.22

・事後授業 ・・・・・・・P.25
・参加者の声 ・・・・・・・P.25
・編集後記 ・・・・・・・P.26
・謝辞 ・・・・・・・P.26

©2019 国立大学法人北海道大学

ファースト・ステップ・プログラム（FSP）とは？

（HP より抜粋, https://www.oia.hokudai.ac.jp/be_global/）

全学教育科目のひとつ、「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）：グローバル・キャリア・デザイン 2」は、海外協定校等の教育機関での授業体験や学生との交流、国際機関や国際的に展開している企業の現場見学、及び海外で勤務する方々との対話などを短期間に体験する機会を提供します。このプログラムは、学生にとって交換留学、語学研修、国際インターンシップやボランティア等、本学内外で実施される様々な海外プログラムに挑戦する最初の一歩となることを目的としています。科目を開発する段階では、海外に向けての第一歩という意味を込めて、「ファースト・ステップ・プログラム」という名称を使っていたので、現在、通称を「FSP」としています。（以下、本授業科目を「FSP」と表記します。）

プログラム参加を通して、学生がグローバルなキャリアについての視野を広げ、計画性をもって、将来的にグローバルだけでなく、日本の国内でも活躍するような「グローカル」な人財として育っていくようになることを目指しています。

第 25 回 FSP アジアの概要

海外研修期間：2019 年 3 月 3 日（日）～ 3 月 15 日（金）
渡航先：シンガポール共和国
　　タイ王国（主にバンコック）
参加人数：26 名
参加費用：23 万円程度
【費用に含まれるもの】航空運賃、宿泊代（朝食と会議室等施設利用料を含む）、専用車借り上げ代
奨学金：日本学生支援機構（JASSO）の奨学金または北海道大学・ニトリ海外留学奨学金（どちらも 10 万円）が支給される可能性があります。

私たちが考える FSP について

私たちが考える他の留学プログラムと FSP の違いとして 2 つ挙げることができます。

1 つ目は、協定校訪問や企業訪問を通して自分のキャリアを考えるきっかけとなるということです。この授業で学ぶキャリアとは、生き様、すなわちどう生きるか・どう生きてきたかです。FSP では、海外研修中に複数の大学(協定校含む)や企業・組織を訪問することができます。大学で実際に授業を受けたり、協定校の学生と交流したりしました。また、事前に訪問先について学習したうえで、実際に海外で働かれている方に広くグローバル・キャリアについて伺い、企業・組織の見学をさせていただくこともできます。この経験から広くグローバル・キャリアについて考えることができます。これは、まさに自身のキャリア形成の「ファースト・ステップ」となるでしょう。

2 つ目は、約 2 週間の海外研修を 26 名の仲間と寝食を共にして協力して過ごすということです。FSP には学年や学部は多様ですが、同じように海外に興味を持った北海道大学の学生が集まっています。そのような仲間と学びや気づきを共有して意見交換することで、異なる視点や考え方に出会い、新たな学びや気づきを得ることができます。FSP を通して、仲間の大切さや対面でのコミュニケーションの大切さを学んだ学生も多く、自身の成長にもつながるでしょう。

（文責：坪）

©2019 国立大学法人北海道大学

参加メンバー紹介

〈三段目左から〉
松村優作
（水産学部１年、企業訪問）
立野涼仁
（医学部１年、企業訪問）
青木真太郎
（総合理系１年、記録広報）
坪智也
（獣医学部２年、記録広報）
下口円
（教育学部１年、プレゼンテーション）
子安竜司
（農学部１年、記録広報）
◎渡邉健太郎
（法学部１年、総務企画）
菱由風
（文学部１年、企業訪問）
藤原千歌
（文学部２年、企業訪問）

〈二段目左から〉
〇茂手木広一
（総合理系１年、総務企画）
佐藤祐也
（農学部１年、記録広報）
酒井智子
（水産学部１年、プレゼンテーション）
大田垣尚
（農学部１年、プレゼンテーション）
竹内萌
（水産学部２年、プレゼンテーション）
及川ゆい
（理学部２年、記録広報）
長谷彩花
（農学部１年、企業訪問）
福士佑香
（薬学部１年、企業訪問）
松田美和
（法学部２年、総務企画）

〈一段目左から〉
中橋穂乃香
（農学部１年、総務企画）
中尾凪沙
（医学部１年、記録広報）
長谷川翠
（総合理系１年、総務企画）
〇芹澤実咲
（総合理系１年、総務企画）
江端美織
（医学部１年、総務企画）
中森瑞歩
（農学部２年、記録広報）
加藤千裕
（文学部１年、総務企画）
井川優羽奈
（農学部２年、記録広報）

（◎はリーダー、〇はサブリーダーを表す。学年、所属は参加時。）

（文責：坪）

©2019 国立大学法人北海道大学

班の概要

メンバーはそれぞれの役職・班に所属し、活動を行います。班は以下の 4 つに分かれています。

・総務企画班

訪問校について事前調査、訪問校での学生交流の企画運営、訪問校についての学習会、学生ミーティングの企画運営を担当。また、宿泊先の部屋割り、名札や参加者リストの作成、訪問校への先導、訪問校への手土産購入、お礼状の作成を担当。

〇リーダー・サブリーダー

総務企画班の仕事に加え、チーム全体のまとめ役や夜のミーティングの司会進行を担当。また、全ての班の班長との連携・協力、研修中のスケジュールの管理、FSP の先輩方との交流会の企画・運営を担当。科目担当者・引率者の補佐的役割。

・企業訪問班

訪問する企業・組織について事前調査、全体での学習会、企業・組織訪問時の先導、手土産購入、議事録作成、お礼状の作成を担当。

・プレゼンテーション班

訪問校の学生に、北海道大学の魅力的な点について英語で紹介するプレゼンテーションを担当。

・記録広報班

Facebook・Twitter の SNS を通しての研修報告、海外研修時の写真の収集、写真利用の許可を取得、記録活動と研修後の帰国報告会での発表、ならびに本報告書の執筆を担当。各 SNS のアカウントについては巻末に記載。

（文責：及川）

©2019 国立大学法人北海道大学

研修日程

	日付	都市、地域	活動内容	
1	3/3（日）	新千歳→ シンガポール	7:00 8:00 9:40 10:50 18:45	新千歳空港集合 新千歳空港発 羽田空港着 羽田空港発 シンガポール・チャンギ国際空港着 アルバート・センター・フードコートにて夕食
2	3/4（月）	シンガポール	10:00-11:30 15:00-17:00 17:00-21:00	企業・組織訪問① KIKKOMAN SINGAPORE R&D LABORATORY PTE. LTD 企業・組織訪問② SECOM (Singapore) Pte Ltd 訪問国調査活動
3	3/5（火）	シンガポール	9:00-16:00 16:00-21:00	協定校訪問① National University of Singapore (NUS) (学生交流→講義→ランチ→キャンパスツアー) 訪問国調査活動
4	3/6（水）	シンガポール	9:30-11:00 11:30-13:00 15:00-17:45 17:45-21:00	企業・組織訪問③ アジア・大洋州三井物産株式会社 Lau Pa Sat Festival Marketにてランチ 企業・組織訪問④ Mechanobiology Institute (MBI) 訪問国調査活動
5	3/7（木）	シンガポール	11:00-14:00 14:00-21:00	協定校訪問② Singapore Management University (SMU) (学生交流→ランチ→キャンパスツアー) 訪問国調査活動
6	3/8（金）	シンガポール	9:00-12:30 12:30-21:00	振り返りミーティング 訪問国調査活動
7	3/9（土）	シンガポール → バンコック	12:25 13:45	シンガポール・チャンギ国際空港発 スワンナプーム国際空港着 CHAMCHURI SQUARE にて夕食
8	3/10（日）	バンコック	8:00-16:00 18:00-20:30	訪問国調査活動 北海道大学バンコック校友会エルム （本学 OB・OG 会）懇談
9	3/11（月）	バンコック	10:00-11:30 13:30-14:00 14:15-17:30	企業・組織訪問⑤ 国際連合児童基金（UNICEF） クロントイ市場見学 企業・組織訪問⑥ タイ財団法人シーカー・アジア財団(SAF)

©2019 国立大学法人北海道大学

			17:30-20:30	訪問国調査活動
10	3/12（火）	バンコック	8:00-10:30	訪問国調査活動
			11:30-20:30	協定校訪問③ Chulalongkorn University （ランチ→講義→交流会→キャンパスツアー→夕食）
11	3/13（水）	バンコック	10:00-15:00	協定校訪問④ Mahidol University （キャンパスツアー→ランチ→講義→交流会）
			16:30-20:30	訪問国調査活動
12	3/14（木）	バンコック	9:00-13:30	振り返りミーティング
			13:30-20:30	訪問国調査活動
13	3/15（金）	バンコック→ 新千歳	8:45	スワンナプーム国際空港発
			16:05	成田空港着（一部解散）
			18:45	成田空港発
			20:35	新千歳空港着

宿泊先
シンガポール：Hotel Grand Pacific Singapore
バンコック：MANDARIN HOTEL Managed by Centre Point

※NUS は北海道大学と医学部間の部局間協定、その他の大学は北海道大学の協定校。
（文責：及川）

事前授業

第１回

概要:担当者紹介、授業概要、受講マナー、手続き等および課題、班分け

3 名の担当者(荒井克俊先生（科目責任教員）、肖蘭先生（科目担当教員）、川端千鶴先生（第 25 回 FSP アジア引率）)の紹介の後、FSP という授業の内容や目指すものについて確認しました。次に E メールの書き方や時間厳守、身だしなみ、礼儀正しい態度等のマナーについて改めて学びました。続いて手続等の説明の後に班分けをしました。第 1 回ではほとんどの人が初対面だったためか全体的に静かな雰囲気ではありましたが、FSP の趣旨や到達目標を確認することでそれぞれが確かな目的意識を持つことができました。また、マナーについて改まって大学で学ぶことは新鮮な体験でした。班分けはスムーズに決まり、幸先の良さ
を感じました。

同日のお昼休みにはランチ会が開催され、和やかな雰囲気の中参加者同士での交流を楽しみました。

©2019 国立大学法人北海道大学

（第 1 回事前授業の様子）

第 2 回

概要：成績評価基準、授業課題、班活動

成績評価基準についての説明の後、目標達成自己評価シートや訪問国調査活動(P.16 で後述)等の授業課題を確認しました。その後、総務企画班、企業訪問班、プレゼンテーション班、記録広報班に分かれて班活動を行いました。今後の活動方針を話し合い、短い時間でしたが第 1 回よりもコミュニケーションを取ることができました。

第 3 回

概要：キャリア・デザイン、研究者のグローバル・キャリア・デザイン、異文化理解、異文化コミュニケーション

キャリア・デザインと異文化理解・異文化コミュニケーションについて学びました。キャリア・デザインについて深く学ぶことは、大学に入ってからどの授業でも行ってこなかったため大変勉強になりました。また自身のキャリア・デザインを記述するワークシートを使ってグループワークを行い、お互いに将来について話すことで参加者同士の距離が一気に縮まりました。異文化理解、異文化コミュニケーションに関する講義の中では、「国籍や言語が違う人だけでなく、この場にいる参加者同士も異文化を持っている」という話が印象的でした。

第 4 回

概要：引率者紹介、海外における安全管理・危機管理、ケーススタディ

引率者（井上修平客員教授、田代陽子国際交流課係長）の紹介に続いて海外における安全管理・危機管理に関して動画で学び、グループでケーススタディを行いました。体調を崩した例や見知らぬ親切な人を信頼してついて行ってしまった例をもとに、どうすれば危険を回避できるのか話し合いました。この活動を通し、これから日本とは違う環境に飛び込むのだということを実感し気を引き締めました。また、グループワークは今まで話したことのない FSP 生ともコミュニケーションができる良い機会となりました。

©2019 国立大学法人北海道大学

（第 4 回事前授業の様子）

第 5 回

概要：良い聴衆について、効果的なフィードバックの仕方、プレゼンテーションとフィードバック、異文化理解、異文化コミュニケーション、最終確認、学生によるお知らせ

最後の事前授業ということで盛り沢山の内容でした。プレゼンテーション班の発表を聴いてフィードバックを行い、研修先でのプレゼンテーションをより良くするために内容の配分やスライドの見やすさに関して考えを出し合いました。応援に来てくださった FSP の先輩方にも聴いていただき、プレゼンテーションの軸がぶれない事の重要性など、貴重な意見をいただくことができました。

同日のお昼休みには過去 FSP 参加者とのランチ会が開催されました。第 25 回参加学生は、先輩方から持ち物のアドバイスや FSP で行った場所の詳しい話、みんなでミーティングをしたことが楽しかったという話などを聞き、これからの研修に対する意識を高めました。

（文責：井川）

（ランチ会の様子）

©2019 国立大学法人北海道大学

現地研修（シンガポール）

2 日目

KIKKOMAN SINGAPORE R&D LABORATORY PTE. LTD 様

研修内容の詳細については掲載致しません。

SECOM (Singapore)Pte Ltd 様

午後は、SECOM (Singapore)Pte Ltd 様を訪問しました。日本初の警備保障会社であるセコム株式会社様は、日系企業が海外進出するのに合わせて海外へ事業を拡大してきたそうです。海外進出における難点としては、国ごとに犯罪の傾向が異なり日本で確立したサービスを現地の状況にあわせて適合させること、また日本式の警備サービスとは異なる欧米方式がすでに浸透している国において包括的であるが高額となる日本式のサービスをお客様に受け入れていただくことなどが挙げられます。
そのような難しい環境の中 SECOM (Singapore)Pte Ltd 様の社長としてお勤めになってきた石田健二様にお話を伺いました。

海外における SECOM (Singapore)Pte Ltd 様の強みは、海外ではほぼ行われていないセキュリティプランニングにあります。海外の一般的な警備は、顧客に頼まれた分だけ防犯設備を設置するというものです。それに対し SECOM (Singapore)Pte Ltd 様は、顧客のニーズを聞いた上でマーケティング、リスク分析、セキュリティプランニングを行います。さらに設備設置後は設備のモニタリングを行い、異変があったら緊急対処、メンテナンス、調査まで行なうそうです。この強みを活かした結果、現在の契約の 6 割は外資系の企業になったそうです。

石田様はキャリア形成についてもご講話してくださいました。石田様は大学入学後漫然と過ごされていたそうですが、大学 4 年次の研究室配属が転機になったと伺いました。研究に没頭され、大学院の修士課程をご卒業なさるまでの 3 年間ほぼ研究室で暮らしていたとおっしゃっていました。セコム株式会社様に入社なさった後、機会に恵まれてアメリカの大学へ社費留学をなさり、その後同学で MBA（経営学修士）を取得なされました。帰国なさった後は国際事業に関わるようになり、現在は SECOM (Singapore)Pte Ltd 様の社長をお務めです。石田様は、「過去のその時々は気づかなかったけれども今振り返ってみれば全ての経験がつながっていた、その結果、今の自分が形成された。」とおっしゃっていました。同じようなことを、別の訪問先企業の方々もおっしゃっていました。海外でキャリアを積んでいらっしゃる方々がそろって同じことをおっしゃるのは不思議な感覚でした。10 年後、20 年後になってみないと分からないのでしょうが、大学生の今いろいろな経験を積むことが将来活きてくるのだと強く思いました。ボランティア、サークル、アルバイト、留学などを通じて経験を積んでいこうと思いました。また、勇気を出して転がってきたチャンスを自分の手でつかむこと、そのために虎視眈々と準備をしておくことが大切だとおっしゃいました。今回の FSP も、大きなチャンスになったと私は思っています。これからのチャンスに備えておこうと思いました。

ご講話の後、SECOM (Singapore)Pte Ltd 様のオフィスで最新の防犯設備や貸金庫、実際の遠隔警備の様子などを見学させていただきました。オフィス内にはイスラム教徒の社員の方がお祈りをするスペースがありました。また、宗教的理由で会社を休んだり早退したりすることもできるそうです。シンガポールは多文化社会であり、共存するためには違う宗教・文化同士がお互いを尊重し理解することが強く求められると考えられます。これは仕事をする上でもいえることで、信頼関係を築き気持ちよく仕事す

©2019 国立大学法人北海道大学

るためにも自分とは違う宗教・文化を理解し合うことが大事なのだとしみじみと感じました。
（文責：及川）

（石田様（最前列右から 4 番目）、川合様（最後列左端））

3 日目

National University of Singapore

National University of Singapore（以下 NUS と表記）は 1905 年に創設され、法学部、医学部、音楽学部など 17 の学部・スクールを持つ総合大学です。北海道大学とは医学部間の部局間協定を結んでいます。また、NUS は The Times Higher Education のアジア大学ランキングで 1 位に選ばれています（2018 年）。

NUS では最初に、NUS の学生とゲームやプレゼンテーション発表などを通して交流を深めました。その後、NUS の学生と一緒に「シンガポールにおける J ポップ」についての授業を受講しました。授業を受け、数多くの J ポップがシンガポールを含め東アジアや東南アジアで人気があることが分かりました。シンガポールで 2 週間もチャート入りした J ポップの曲があったり、東アジアや東南アジアでは現地の言葉でカバーされドラマの主題歌として使用されたりした曲もあるようです。シンガポールと日本の意外な関わりについて知り、シンガポールをより身近に感じることができました。授業は勿論英語で行われ、最初の訪問校での授業ということもあり、英語を聞き取ることにかなり苦労しました。

授業後は、NUS の学生とともにランチを楽しみました。学食にはシンガポールの料理はもちろん、ハラルフードや日本食までありました。様々な国の留学生への配慮が見られました。その後、NUS の学生にキャンパスツアーをしていただきました。キャンパスは広く様々な設備がありまるで 1 つの街のようでした。また勉強ができるスペースがいたるところにあり、学生たちが真剣に学んでいる様子をみて、私たちも見習わなければならないと思いました。
（文責：坪）

（NUS の学生とともに）

©2019 国立大学法人北海道大学

4 日目

アジア・大洋州三井物産株式会社様

シンガポール 4 日目の午前、アジア・大洋州三井物産株式会社様を訪問させていただきました。アジア・大洋州三井物産株式会社様はエネルギー、ファッション、食品など、様々な分野に進出されている会社です。中野真寿様、平田京子様と北海道大学 OB の松本伸一様、繁富啓詞様にお話を伺いました。

まず、平田様にアジア・大洋州三井物産株式会社様について説明していただきました。その後、皆様にこれまでのキャリアについてお話をしていただきました。たくさんお話していただいた中から、印象に残ったものを以下にまとめます。

松本様は入社前まで海外へ行かれた経験がなかったそうです。私は海外で働く方々は会社に入る前から海外へ留学や旅行をされていると思っていたので驚きました。グローバルなキャリアに必要なことは人間力だとお話ししてくださいました。人間力とは、様々な経験をしていくうちに結果的に身につくものであるため、身につけようと思って身につけるのが難しいともおっしゃっていました。そのような人間力を今から少しでも養うために、今まで勇気が出なかったことにも挑戦し、たくさんの経験をしたいと思いました。

繁富様は学生時代から世界に通用する人間になりたいと思い、空きコマは英語の授業を入れるなど、常に自分を高め、成長・学習してこられたそうです。繁富様は先を見据えて行動されてきた結果、自分の納得のいくキャリアを築かれてきたのだと感じました。私は今までなんとなく大学生活を送ってきたので、心を入れ替えて熱心に学問に取り組もうと思いました。繁富様は海外と日本の文化の違いで学んだことも話してくださいました。中東の方と仕事をする際、メールでのやり取りだけで仕事を進めていると、取引先の方からお叱りを受けたことがあったそうです。その理由は、対面でのコミュニケーションが不足していたことでした。中東では挨拶がとても重要で、このとき効率重視ではなく、対面でコミュニケーションをとることの重要性に気づかれたそうです。このお話を聞き、人相手だからこそ、効率だけではなく信頼関係が必要なのだと感じました。

中野様は採用にあたって、どこを見るかという点についてお話ししてくださいました。面接のときに、目標・目的をもって生きてきた人かどうかを重視されるそうです。それは、会社では目標を達成することが仕事であるからです。グローバルに活躍できる人材とは、英語力のある人ではなく人間力のある人だとおしゃっていました。私は海外で働くなら英語ができることが第一で、その他のことは二の次だと思っていたのでこのお話を聞いて意外に思いました。また、目的・目標を持って生きることはまさに自分のできていない部分であったためとても心に刺さりました。これからは日々自分が目的を持って行動しているか考える癖づけをしようと思います。

（文責：中森）

©2019 国立大学法人北海道大学

（アジア・大洋州三井物産株式会社様）
中野様（最前列右から 6 番目）、繁富様（5 番目）、
平田様（2 列目右端）、松本様（最後列右から 3 番目）

Mechanobiology Institute, National University of Singapore(MBI)様

午後には MBI 様を訪問し、茂木文夫様、遠山祐典様にお話を伺いました。その後、ラボ見学もさせていただきました。

茂木様からは MBI 様が扱っている Mechanobiology という分野についてお話ししていただきました。Mechanobiology とは、物理的要因、特に機械的要因がどのように細胞に影響を与えるのかを調べる学問の領域です。細胞と聞くと生物学や化学を思い浮かべる人が多く、物理や数学などを思い浮かべる人は少ないのではないでしょうか。しかし、細胞は 3D 空間にあるという重要な物理的側面があり、それ故 Mechanobiology は物理の知識が大きく関わる分野です。研究というと 1 つのことを狭く深く掘り下げることをイメージしていましたが、実際は様々な分野についての知識が必要で、今までたくさんの教科を勉強してきたことも無駄ではないのかもしれないと思い直しました。

遠山様は自身のキャリアについてお話してくださいました。遠山様は博士課程の際に、周りにはいくらでも優秀な人がおり、このままでは研究者としてやっていくのは厳しいと思われたそうです。そこで、日本では盛んでない分野を研究対象にし、「希少性」を伸ばしたところ、現在研究者として活躍されています。世界には優秀な人は巨万といて、「誰にでもできることを際立ってできる」ことは難しいため、「できる人が少ないことをそこそこにできる」から始めることで希少性を身につけるという選択肢があることが分かりました。FSP 生からのどのようなバランスで勉強したらよいかという質問に対し、「なんでも上手にバランスよく勉強する必要はなく、興味の赴くままにやるのが良い。」と答えていただきました。 私だったら自分より優秀な人がたくさんいるから諦めようという思考をしてしまいますが、遠山様は自分が生き残るための戦略を考え実行されており、歴然とした差を感じました。何に対しても理由をつけて簡単に諦めることはやめようと思いました。また、興味のあることに関しては大学の授業の範囲に縛られず、自分で学習しようと思いました。

（文責：中森）

©2019 国立大学法人北海道大学

（ラボ見学の様子）

5 日目

Singapore Management University

5 日目には Singapore Management University（以下 SMU）を訪問しました。学生交流ではフリートークや英語での伝言ゲームを楽しみました。最初のフリートークでは少し緊張も見られましたが、一緒に伝言ゲームをすることでお互いに打ち解け、非常に盛り上がりました。

次に SMU の学生によるプレゼンテーションを聴きました。SMU は会計学部や経済学部、情報学部をはじめとする 6 つの学部からなることや、さまざまな部活動が存在すること、綺麗な学生寮など多くの魅力について知ることができました。それから、北海道大学のプレゼンテーションを行いました。NUS に続き 2 回目となるプレゼンテーションは前回よりもかなり多くのオーディエンスの前での発表となりました。SMU の学生は皆熱心にプレゼンテーションを聴いてくれました。北海道大学の魅力が十分に伝わったのではないかと思います。

続いて、全員でランチをしながら交流を楽しみました。SMU で用意していただいたシンガポールの美味しい料理をいただきながら、互いの趣味の話などを楽しみました。日本の文化にとても詳しい学生が多く、驚きました。日本の芸能人やテレビ番組が好きでよく動画や音楽を楽しんでいるという学生との会話の中で、共通の歌手が好きだということが分かり、お気に入りの歌やライブの話で盛り上がったことが印象的でした。

最後に、キャンパスツアーをしていただきました。大きな図書館には多くの学習スペースやディスカッションルームはもちろんのこと、寝転ぶことのできる大きなクッションや楽器の置いてある防音室、ゲームコーナー、卓球台に至るまでさまざまな設備が充実しており、1 日いても飽きないのではないかと思うほどでした。日本でも、勉強するための設備だけではなく楽器やゲームなどのリフレッシュする設備も充実した図書館が身近にあると、多くの学生が喜んで利用するのではないかと思いました。

（文責：井川）

©2019 国立大学法人北海道大学

（左：SMU での集合写真、右：同校図書館の一部）

6 日目

振り返りミーティング　シンガポール

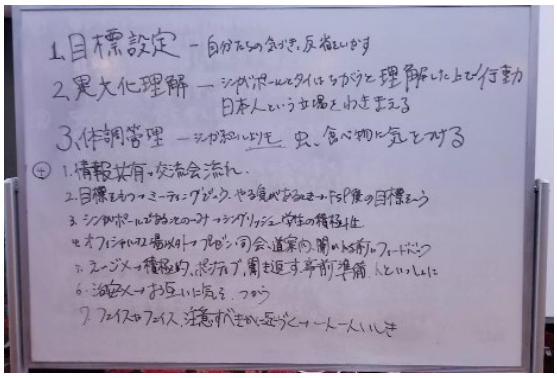
シンガポール滞在最終日の午前中に、シンガポールでの学びを全員で振り返りました。振り返りミーティングのテーマは「シンガポールでの気づき」でした。タイムマネジメントは生徒が行い、活発な意見交換が行われました。いくつかの意見を紹介します。

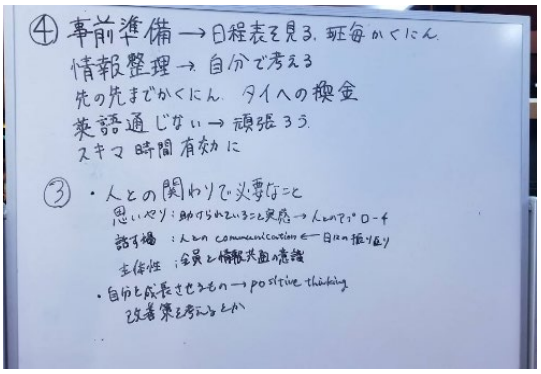
1　仲のよい人としか話していなかった。
2　情報共有ができていなかった。
3　英語力がなくて現地の人とあまり交流できなかった。
4　夜に行われたミーティングで、皆から様々な意見を聞くのが面白かった。視野が広がった。

このように一通り意見が出た後、これらの気づきをタイや日本の生活でどう活かすか話し合いました。
1 の解決策→移動時間やホテルなどで自分から積極的に声をかける。
2 の解決策→耳で聞いた情報は文字に起こして全員への周知。
3 の解決策→単語やジェスチャーだけでも結構伝わる。伝えようと努力することが大事。

私は今まで、複数人で何かを経験した後に、振り返りや新しく学んだことを皆で共有したことがなかったため振り返りミーティングはとても新鮮でした。自分とは違う視点の意見を聞くのは視野が広がり面白かったです。途中、生徒達で話し合いを進めていったところ、教職員スタッフが主導するミーティングの方向性からそれてしまいました。自主性も大事ですが、周りをよく見ること、先生とコミュニケーションをとることの大切さに気づかされました。個人だけでなくチームとして成長できる部分がまだまだあると感じられたミーティングでした。
（文責：及川）

©2019 国立大学法人北海道大学





（ミーティングで全員から出た意見）

シンガポール訪問国調査活動

FSP では、研修中に訪問国調査活動を行います。これは、2 週間という短い滞在期間の中で、より能動的に訪問国に関する知識や理解を深めるために行なう訪問国に関する社会調査です。FSP 生それぞれが事前に調査したいトピックを決め、インターネットや図書館を利用して調べてきました。それをもとに、現地で調べたい内容に関するインタビューなどを行いました。ここでは、シンガポールでの訪問国調査活動について紹介します。

シンガポールでの訪問国調査活動では、それぞれが自身の興味のあるトピックに関して調査しました。シンガポールには多様な人々が住んでいます。様々な人種（中華系、マレー系、インド系など）や異なる宗教（仏教、イスラム教、キリスト教など）といったシンガポールの「多様性」は至るところでみられました。またシンガポールは日本のように公用語が 1 つではなく、4 つの公用語（英語、マレー語、中国語、タミル語）があります。このような言語、宗教観の違いについて調べた学生も多く見られました。シンガポールの学生に聞いたところ、2 言語以上話せるのが普通であると聞き、日本との違いに驚きました。シンガポールでは民族、言語、宗教の多様性のほか、男女の平等に関しても先進的であることが企業訪問などを通して分かりました。また、このような異なるバックグラウンドをもつ人々が対立を起こさず調和している背景にある、人々の多様性に対する考え方を NUS の学生に聞きました。シンガポールではかつて対立が頻繁に起きていましたが、政府の努力を経て現在では調和がとれています。例えば“Singapore’s Pledge”という、他の民族に対して差別をしない宣言を小学校で毎日唱和させる制度があります。これに対して政府によるプロパガンダだと思う人もいましたが、何れにせよ「人と違って当然」というスタンスが身についたそうです。教育によって人の考え方を変え、調和を保つようになったということが分かり、興味深かったです。

（シンガポール動物園にて）

また、訪問国調査活動では、3、4 人のグループで行動しましたが、個性的な建物を有した植物園であるガーデンズ・バイ・ザ・ベイを訪れた班や世界でも有名なシンガポール動物園を訪れた班もありました。FSP 生の中にはシンガポールにおける動物保護に対する意識調査を訪問国調査活動のテーマに設定

©2019 国立大学法人北海道大学

した人がいました。シンガポール動物園には絶滅危惧種に関する十分な説明が書かれた展示があり、動物園が教育の場としても種の保全を果たしていることを学びました。また、檻や柵ではなく植物や水路などを使いより自然な状態で動物を展示することで、動物に対する配慮もされていることを学びました。シンガポールの民族多様性を調べるべく、アラブストリートやリトルインディア、チャイナタウンへ行き、買い物をしたり、現地の料理を食したりした人もいました。それぞれ雰囲気が大きく異なり、全く違う国にいるような感覚でした。協定校訪問で交流を深めた NUS の学生にシンガポールを案内してもらったグループもありました。
（文責：坪）

（NUS の学生とともに）

©2019 国立大学法人北海道大学

現地調査（タイ）

8 日目

北海道大学バンコック校友会エルム会員の皆様と懇談

タイ 2 日目の夜は北海道大学の同窓生の方々のご厚意で懇談会を開いていただきました。海外で働く先輩方のリアルなお話を聞き、海外で仕事をするということがより身近に感じられました。タイでは仕事時にはほとんど英語を使うそうで、採用の際も英語ができる人材を求めているそうです。そのためタイ語があまりできなくてもどうにか対応できると聞き、タイでは想像以上に英語が浸透していることが分かりました。他にもタイには年休の他に病休という制度があり、体調を崩した時に休みを取りやすいことや、屋台などの外食文化が発達しており自炊をほとんどせずに済むことなど、タイと日本の違いを感じました。先輩方の中には、自分が大学で勉強したこととは全く違うことをやりたいということで工学部から食品メーカーに就職され、海外で働きたいという目標も叶えられた方もいらっしゃいました。しっかり自分のしたいことを持ち、そのために行動をすることの大切さを学ばせていただきました。また、私自身明確な進路が決まっていないまま今の学科に来てしまい、選択肢を狭めてしまったのではないかという不安がありました。しかし、自分で選択肢を狭めていただけで、気持ちと努力次第では無数の選択肢があることに気づけました。

（OB の方々に北海道のお土産を贈呈）

（文責：中森）

（OB の皆様と）

©2019 国立大学法人北海道大学

9 日目

United Nation Children’s Fund(国際連合児童基金) East Asia And Pacific Regional Office 様

午前は United Nation Children’s Fund(国際連合児童基金) East Asia And Pacific Regional Office 様（以下 UNICEF）の伏見暁洋様にお話を伺いました。

UNICEF の伏見様のご講話では、貧困に苦しむ人々の現状やそれに対する支援について、また伏見様ご自身の海外でのキャリア形成について詳しくお話ししていただきました。お話を聴くだけではなく、「世界で最も取り残されている子どもとはどんな子どもか」というお題を出され、ディスカッションを行いました。差別や貧困、その他の劣悪な環境に置かれている子どもについて自分の頭で考えることで、そのような問題に対してより当事者意識を持つきっかけになりました。ご講話では貧困問題について取り上げられましたが、その中で「公平性と平等性は違う」とおっしゃっていました。もともと、一人ひとり置かれている状況が違い、格差があるのに「平等に」どの人にも同じような支援をしてもその不公平な差は埋まりませんが、皆が「公平」になるようにあえて差をつけて支援をすることで格差が埋まる、というお話を聞き、「公平」と「平等」の違いに気づきました。UNICEF の方針は「公平性を重視する」ということでしたが、現実は公平とは程遠く、公平性を実現する難しさを感じました。

また伏見様は海外での勤務時、企画書や報告書の作成を丁寧にできる人が他におらず、担当ではないが自分なら貢献できると思い自ら手を挙げて作成を行っていたというお話も印象的でした。このお話を聞いて、どんな環境でも自分が貢献できる仕事を発見して進んで行おうと思いました。伏見様はご自身のキャリアに誇りを持っておられ、国連の職員として働く選択肢を考えるきっかけとなりました。

（文責：井川）

タイ財団法人シーカー・アジア財団様

午後はシーカー・アジア財団（以下 SAF）様で八木澤克昌様にお話を伺いました。SAF は主にタイの貧困層への教育支援を行なっている法人です。タイは世界で一番格差が大きい国と言われています。そこで、SAF はコミュニティ図書館事業や移動式図書館を通して教育を受ける機会を提供なさっています。八木澤様がご講話の中で、スラムはバンコックの中でも助け合いが強い地域で、都市部では減っている隣人同士のコミュニティが今も根強くあるとおっしゃっていました。金銭的には貧しいスラムにも豊かな面があると感じました。また、八木澤様が家族でスラムに住み始めたと知り、その行動力と勇気に衝撃を受けました。スラムに住み始めた際、八木澤様は家の周りで緑を育て始めました。初めは荒らされることもありましたが根気強く育てていくと隣人たちもそれを真似し始めました。なぜなら、人は綺麗な所にはゴミを捨てない傾向があるため、緑を育てていた八木澤様の家の周りだけゴミが捨てられなくなったからです。この行動が次第にスラム全体に広がった結果、道のゴミが大幅に減りました。このお話を聴き、小さな行動が変化をもたらすということを実感しました。

またグローバル・キャリアを形成するにあたって、相手の立場に立って物事を考えるためには相手に応じた「ものさし」を持つことが必要だと伺いました。ここでの「ものさし」とは簡単に言うと、一人一人の常識のことだと考えました。今回は、実際にクロントイ・スラムを歩き回り五感をもって感じ取ることで、教科書で見た光景が、臭いや暑さの実感を伴いより鮮明に胸に刻まれました。この経験から、「百聞は一見に如かず」という諺をより深いレベルで理解するようになりました。実際に自分の目で見てみないとスラムに住む人を真に理解することなど決してできないでしょう。そう考えると家族でスラムへ引っ越した八木澤様の覚悟に改めて敬服しました。相手を理解しその人に応じた「ものさし」を持

©2019 国立大学法人北海道大学

つために、実際に様々なところに足を運びたいと感じました。

（文責：井川）

（クロントイ・スラムを歩いて）

クロントイ市場

クロントイ・スラムの近くのクロントイ市場を訪問しました。ここでは、その活気や熱気と食材の豊富さに圧倒されました。野菜や魚はもちろん、見たこともない食材も多く、子豚の皮や魚の胃、カエルまで陳列されておりタイと日本の食文化の違いを学びました。どの食材も新鮮そうで魚は陳列された台から飛び出すほどでした。また、市場は屋外にあり、生肉が常温で売られていたり、商品のすぐそばをハエが飛んでいたりと日本にあまりない光景も見受けられました。朝の時間を過ぎていたため、すでに閉店したところも散見されましたが、市場の中心部には賑やかさが残っていました。朝は最も取引が活発で、早いところでは午前３時から開店しています。日本のスーパーマーケットでは加工された食品を購入することが多いため、その食品がもとは生きた命であることを実感しにくくなっています。しかしクロントイ市場では生きた鶏のいるかごの上に、皮をはいだだけの、原型をとどめた鶏肉が並べて売られていました。このような光景を目の当たりにして、私たちは日々命をいただいて生きているのだということを改めて実感し、フードロスの問題に対しても真摯に向き合おうと思いました。

（文責：井川）

10 日目

Chulalongkorn University

北海道大学の協定校で「タイの東大」と呼ばれるチュラロンコン大学（以下 CU）を訪問し、工学部の学生と交流しました（以下「CU の学生」は CU の工学部生のことです）。CU の学生と食堂のランチを食べた後、工学部インターナショナルコース１年生の講義に参加させていただきました。その後 CU の学生と交流会、キャンパスツアーをしていただき、最後には一緒に夕食に行きました。

今回は英語で授業を受けるコースに参加させていただきました。講義は 4 つの教室に分かれておりテーマはそれぞれ、Data Science、Product Design、Disaster Management、Ecological Design and Pollution Management でした。どの教室もグループに分かれてのプレゼンテーション発表でした。FSP 生は一人ずつグループに配置されました。CU の学生は皆 FSP 生の伝えたいことを汲み取ろうとしてくれました。気持ちや思いがなんとか伝わったときのうれしさや達成感は素晴らしかったです。最初は緊張

©2019 国立大学法人北海道大学

していた FSP 生が多かったのですが、CU の学生が英語でサポートしつつ話してくれたため、徐々に打ち解けていきました。CU の学生は、私たち FSP 生と同じく母語は英語ではありません。それにも関わらず、英語でコミュニケーションをとっている姿は印象的でした。

（左：ランチの様子、右：講義の様子）

キャンパスツアーで大学構内を見て回ると、緑が至るところに見られたり、歴史ある建物があったりし、その点で北海道大学に似た雰囲気を感じました。また、ラーマ 6 世に関わる建物や銅像、国王を象徴する黄色の旗が掲げられているなど、国王への敬意が感じられました。

キャンパスツアーの後、思いがけず CU の学生が夕食に誘ってくれ、さらに交流を深めることができました。好きなアイドルやアニメの話のときには、日本のアイドルやアニメ、マンガのことを日本人と同じくらい詳しく知っている CU の学生がいて驚きました。英語を上手に話すコツを聞いたり、中には互いの母語を教えあったりした FSP 生もいたようです。お互い母語ではない英語を用いてそれぞれの文化について交流するのは、新鮮な感覚で、他愛もない会話なのにとても有意義で楽しい時間となりました。
（文責：及川）

（左：チュラロンコン大学の学生と夕食をともに、右：キャンパスツアー）

11 日目

Mahidol University

マヒドン大学は 1888 年にラーマ 4 世によって設立されたシリラート病院に起源をもち、1893 年に医科大学として設置された大学です。現在は、総合大学として理学部・医学部・工学部・獣医学部・公衆衛生学部・人文社会学部など 17 の学部を有しています。

©2019 国立大学法人北海道大学

（マヒドン大学の学生とともに）

マヒドン大学では、交流会が催されました。マヒドン大学の博士課程所属の学生にじゃんけんを使ったゲームを用意していただいたり、パッタイというタイ料理やココナッツ基調のデザートを用意していただいたりしました。マヒドン大学は最後の協定校訪問でしたが、現地の学生との交流はマヒドン大学の学生が着ていた伝統衣装などの話で盛り上がりを見せ、心に残るものになりました。

また、Dr.Sarunya Sujaritpong に人口と環境問題に関するレクチャーも行っていただきました。人口増加による環境への影響、また環境が人間に与える影響を学びました。講義の内容に関するクイズコーナーでは、最高得点者がマヒドン大学の学生と踊るという場面もありました。

キャンパスツアーでは、トラムというバスのような乗り物に乗っていろいろな学部の建物を見学させていただきました。構内にある伝統的な住居に入らせていただくこともできました。中には神聖とされるお面や仏殿があり、皆で五体投地を教わり仏像を拝みました。大学博物館では、パネルや展示物を見ながらガイドさんからマヒドン大学の歴史を学びました。英語への苦手意識等から今までの協定校訪問で勇気が出ず会話が少なかったり、自ら進んで話しかけられなかったりしたという人もいましたが、最後の協定校訪問としてその反省点を踏まえ自らマヒドン大学の学生に話しかけ、会話も弾んだ素晴らしい交流会になりました。

（文責：坪）

（トラムに揺られて）

12 日目

振り返りミーティング

第 1 回事後授業として、チュラロンコン大学の教室をお借りして全員で振り返りを行いました。テーマは 2 つあり、

1　シンガポールとタイで学んだこと・気づいたこと

2　FSP を通して学んだこと・気づいたこと

です。

©2019 国立大学法人北海道大学

1つ目のテーマの文化的な気づきとして、シンガポールでは多様性への理解が進んでいること、学生が勉強熱心であること、キャッシュレス化が進んでいることが挙がりました。タイでは屋台や観光地で英語や日本語を話せる人が多く、異なる言語を話すことへのハードルが低いことや、車線変更が自由であることなどが挙がりました。その他の気づきとして、英語で思っていることを伝えられないことへの歯がゆさや、何事も自分の足を運び、自分の目で見て、聞いて、考えることの大切さを学んだという意見もありました。

2つ目のテーマではFSP生26名全員が考えを発表しました。集団行動を通して、対面でコミュニケーションをとることの大切さを学んだという意見や、企業訪問を通して社会人としてのマナーや海外で活躍されている方々の生き様について学んだという意見が多く出ました。他にも、自分が人任せに行動していたことに気づきショックを受けたという意見もありました。

全員の発表後、井上先生と川端先生からご自身のキャリア、すなわち生き様についてお話をいただきました。井上先生からビジネスとは真っ白なキャンバスに絵を描くようなことであるが故、成功の裏にはたくさんの失敗があることを伺いました。私も失敗しても良いので様々なことに挑戦しようと思いました。川端先生からは、先生にとって一番の財産は人であり、人を軸として生きてきたことを伺い、出会いを大切にできる人間になりたいと思いました。また、川端先生ご自身は先を見通しながらも、まずは目の前にあることに一生懸命取り組むという生き方をされていると聞き、日々の怠惰な生活を反省し、何事にも一生懸命取り組みたいと感じました。（文責：中森）

（振り返りミーティングの休憩時間に）

タイ訪問国調査活動

仏教国であるタイにおいて、仏教がいかに人々に影響を及ぼしているか調査すべく、タイの三大寺院巡りをしました。三大寺院とはワット・ポー、ワット・アルン、ワット・プラケオのことです。ところでタイでは川を利用した交通が発達しており、寺院への移動手段として水上バスの“express boat“を利用し、チャオプラヤ川を渡りました。さてワット・ポーでは涅槃像が想像以上に大きく、足の裏の指紋や壁、天井、建物の細部のつくりは精細で、見入ってしまいました。ワット・アルンは釈迦の骨とされるものが収められており、最も神聖であるとされています。仏塔は見上げるほど高く、屋根に付けられた風鐸が涼しげな音を奏でていました。ワット・プラケオは周辺を王宮で囲まれた寺院です。ワット・プラケオ自体は残念ながら改装中でしたが、周りにある王宮は壮大で豪華でした。寺院内では服装に関していくらか決まりがあり、帽子を被っていて注意を受けた人がいました。観光地である以前に、信仰している人にとって大切な宗教施設であることを忘れてはいけないと実感しました。日本とは異なり豪華絢爛なタイの仏教文化を目の当たりにし、同じ宗教でも国や地域によって大きな違いがあることを実感しました。泊まったホテルのすぐ近くの大きな寺院では夜でもまぶしいほどの照明が点けられおり、夜遅くにも関わらず多くの人がお参りに来ていました。道を歩いていても至るところにお供え物と

©2019 国立大学法人北海道大学

線香が置いてありました。

以上の一連の調査から、タイの人々は非常に信仰熱心であると感じ、タイでは日常生活の中に宗教が深く入り込んでいることを学びました。

（左：ワット・アルン、右：ワット・ポーの涅槃像）

人々と音楽との関わりを調査すべく、タイの国立博物館へ行ったグループもありました。タイ国政府観光庁公式サイト※の記事によると、この博物館はかつての副王宮と 1966 年に加えられた近代的な建物からからなる、タイ最大の博物館です。博物館では、仏教にまつわる遺物や、タイ王室にまつわる品々、伝統的な楽器や工芸品に至るまで、様々なものを見ることができ、楽器の演奏も聴くことができました。事前の調査でタイからインドネシアにかけての東南アジアの地域は、ゴングチャイム文化という文化圏に属しているということが分っていましたが、実際に見たりその音色を聴いたりしたことで、似ている文化であるということを実感することができました。

（国立博物館で展示されていた楽器）

タイで性に関する意識を調査すべくニューハーフショーを鑑賞したグループもありました。タイは性に関する考えが寛容な国と言われています。ショーはダンスや歌、衣装が華やかでした。ニューハーフの方たちはとても堂々としており自分の美しさを誇っているようで、自分に自信を持って生きている人は輝いていると感じました。多様な性を受け入れる文化がニューハーフの方たちが輝ける環境を作り出せているのではないでしょうか。さらにタイでは女性の社会進出が進んでおり、管理職に就いている女性の割合も高いというお話をタイの企業で働く方や学生から多く聞きました。また CU の学生に質問したところ、結婚後パートナーに仕事をやめて家庭に入ってほしいと考えている学生は一人もいないことが

©2019 国立大学法人北海道大学

分かりました。このように多様な性に関する考え方や女性が活躍できる環境について、実際にタイに住んでいる人がどう感じているかを知ることができて非常に勉強になりました。タイにおける女性の社会進出や多様な性に対する考え方は先進的であると感じました。

※タイ国政府観光庁公式サイト（https://www.thailandtravel.or.jp/national-museum-bangkok/　2019 年 4 月 13 日閲覧）

（文責：井川）

©2019 国立大学法人北海道大学

事後授業

第 2 回事後授業（第 1 回事後授業は P.21-22 参照）ではまず記録広報班によるプレゼンテーションを行い、応援に来てくださった FSP の先輩方から、このプレゼンテーションで伝えたいテーマやそれを支える理由の構成等に関してフィードバックをいただきました。また第 25 回 FSP 生からも書面にてフィードバックを提出してもらいました。その後、FSP を通してキャリアについて学んだことや気づいたことを 3,4 名のグループに分かれて FSP 生同士で共有しました。理系で大学院に行くのが当たり前だと思っていたましたが、周りに合わせず就職という選択肢に気づけた人や、逆に文系であっても大学院に行くという選択肢に気づいた人もおり、各々の視野が広がっていることを実感しました。
（文責：井川）

（第２回事後授業の様子）

参加者の声

プレゼンテーション班の竹内萌さんに話を聞きました。プレゼンテーション班は 4 人で出国前からたくさんの時間と労力を使い、より良い発表ができるよう努力していました。その活動の中で最初の方は 4 人全員が意見を言い合えてはいませんでした。しかし、何度も集まるうちに信頼関係ができ、全員が活発に意見を交わせるようになったそうです。プレゼンテーション班の酒井班長も「班員の 3 人には絶大な信頼を置いている。」と言っていました。竹内さんは北海道大学を紹介するプレゼンテーションを作る過程で、自身も北海道大学の良さを再確認できたそうです。川端先生からの、プレゼンテーションを楽しんでやろうというアドバイスで、プレゼンテーションをする側も楽しんでいいのだということにも気づけたと言います。

竹内さんから今後の FSP 生へ向けての言葉をもらったので紹介します。「FSP では様々な背景を持つ人と話す機会がたくさんあります。それらを通し、ぜひ自分の世界を広げてください。」

総務企画班であり、第 25 回 FSP アジアのサブリーダーを務めた茂手木広一さんに話を聞きました。総務企画班では他の様々な班と連携して作業を行い、「連携をとる」ことの重要性を再認識したそうです。中でも 1 番印象に残っているイベントは「シンガポール国立大学への訪問」だったといいます。これが本プログラム初の協定校訪問であり、どこをどうすれば良いのか分からないながらも班のできる最善を尽くしたそうです。なんとか協定校訪問がうまくいった時は本当に嬉しかったとのことです。

©2019 国立大学法人北海道大学

サブリーダーとしては、先生方・参加学生双方の意見を取りまとめ、プログラムにどのように還元していこうかと腐心したそうです。研修中に限らず、研修前後も忙しい大変な役職でしたが、やり抜くことが出来て本当によかったと語ってくれました。

最後に茂手木さんから今後の FSP 生へ向けて言葉をもらったので紹介します。「FSP は自分の現在地を浮き彫りにしてくれる素晴らしいプログラムです。自分の限界や可能性を体感することが出来ます。とにかく、楽しんで何事にも挑戦してみてください。」

（文責：中森）

編集後記

私は海外に行ったことがなかったため、この機会に行ってみたいと思い参加しました。このように単純な思いで参加しましたが、参加前には特に深く考えたことのなかった自身のグローバル・キャリア、集団生活における振る舞い方、格差、貧困等について考える貴重なきっかけになりました。13 日間という短い期間ですが学んだことは非常に多いと、この全体報告書を書くときに改めて感じました。その充実した 13 日間の感動が読んでいただいた方に文章を通して少しでも伝わると幸いです。（井川　優羽奈）

今回のプログラムを振り返ると、まさに「世界が広がっていく」感覚でした。環境、社会、文化が違うと、生き方や考え方がこんなにも変わってくるのだということをひしひしと感じました。FSP 生同士でも積極的な意見交換が多く行われ、自分では思いつかなかった考えを聞くのは本当に面白かったです。この報告書を読んでくださった方々に FSP の魅力が少しでも伝われば幸いです。最後まで読んでいただきありがとうございました。（及川 ゆい）

FSP を通して学んだものは最初思っていたもの以上でした。言語・宗教・民族の多様性を実感し、同じ目標を持った仲間や現地の学生との交流を通して「対面でのコミュニケーション」の大切さを学びました。この学びや体験がこの報告書を通して少しでも伝われば幸いです。最後まで読んでいただきありがとうございました。（坪 智也）

将来に対する漠然とした不安があり、何か行動したいと思って FSP に参加しました。素晴らしいメンバーに囲まれて過ごし、企業や訪問先の大学の方をはじめたくさんの人と出会うことで刺激を受けました。そして何より楽しく、濃密な時間を過ごすことができました。この学びを活かすため、ここで出会った同志と励まし合いながら目の前のことに一生懸命取り組みたいです。（中森 瑞歩）

謝辞

荒井克俊先生、肖蘭先生、およびプログラムを企画・運営してくださった川端千鶴先生、引率いただいた井上修平先生、田代陽子先生に参加者を代表して、深く感謝の意を表します。

また、このプログラムに携わっていただいたすべての方々に感謝いたします。

第 25 回 FSP アジア　記録広報班一同

©2019 国立大学法人北海道大学

（記録広報班一同）

一般教育演習（フレッシュマンセミナー）：グローバル・キャリア・デザイン 2
第 25 回 FSP アジア　全体報告書
2019 年

編集
第 25 回 FSP アジア　記録広報班
全体報告書担当（井川・及川・坪・中森）

問い合わせ先
北海道大学　国際連携機構国際オフィサー室/学務部国際交流課
電話：（011）706-8032/8040
E-mail：ambitious@oia.hokudai.ac.jp
Website：https://www.oia.hokudai.ac.jp/be_global/
Facebook：https://www.facebook.com/1ststepprogram
Twitter：https://twitter.com/25Fsp